

## もの言う牧師のエッセー 第144話

## 「白バイ交流」

7月17日、日本政府は戦闘機のミサイル技術を英国と共同研究する方針を承認した。翌18日には、英国のマイケル・ファロン国防相が日本の集団的自衛権行使を容認する憲法解釈変更を歓迎する声明を即座に発表するなど、隣国とのゴタゴタをよそに、日本は英国とすこぶる仲が良い。その英国と40年以上に渡って続けられた“白バイ交流”が幕を閉じてもうすぐ一年になる。

1971年10月、昭和天皇は訪英の際、外国首脳的車列を警護する、ロンドン警視庁の白バイ隊えり抜きの特別エスコート隊員らによるアクロバットさながらの運転技術にいたく感心され、それを機に、日本から毎年6人程度の全国から選抜された警官がロンドンに派遣され白バイ研修を受けることになった。時速200キロ以上で長距離走行をしたり、レースコースなどではなく街中で実戦さながらの訓練を受けるため、現実に役立つ高い技術を短期間で習得できるという。

昨年まで9年間、日本の警官らを指導したサイモン・ロビンソン氏は、「日本人は皆、まじめで熱心だった。指導しているうちに、こちらが礼儀正さを教えられた。食べる時『いただきます』と言うことも覚えました。」と、ふり返る。しかし言うまでもなく、日本はかつて英国をアジアから追い払った張本人であり、昭和天皇訪英の際には反日デモもあった。しかしそれらの恩讐を乗り越え、今日までささやかな友情を育んだ彼らを見て、

**「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると  
思いなさい。」ローマ人への手紙 12章 10節、**

という聖書の言葉を思い出した。結局のところ、争いというのは他者を自分より劣っていると認識することに起因する。キリストはそのことの重要性に気付いておられたゆえに、誰よりもへりくだって十字架の道を進まれた。言いかえれば、相手を尊敬するというのは、自己否定に直結すると言っても過言ではない。キリストが十字架を通して自分にしてくれたことを、心から信じた者にはそれが出来る。そして本当の平和を、親善を、友情を打ち立てることが出来る。

2014-7-23

